

シマノフスキと3M

松平 朗

シマノフスキの音楽が、同じポーランドの大作曲家ショパンほどは受容られていないのは何故だろう。それは非常に高度な演奏技巧が要求され、しかも響きが晦渋だから、というのが一般的な説明である。

しかし、よく聴いてみると、高度な演奏技巧は、決して演奏者の名人芸を見せびらかす目的ではなく、晦渋というより“新鮮な響き”のための難技巧であることに気付くだろう。

シマノフスキの生涯は、普遍的なポーランド音楽を創り出す試みの連続だった。それは民俗芸能を安易に利用した郷土的音楽ではなく、格調の高い国民的音楽であり、その理想像は彼が終生尊敬しつづけたショパンの音楽だった。

三国分割による祖国喪失という悲劇を体験したポーランド国民。その一人一人に共通する精神的要素を求めて、シマノフスキは作品を書き続けた。そのことこそが、20世紀後半の輝かしいポーランド現代音楽を産む原動力になっていると私は思う。

「3M」とはシマノフスキの中期の代表的な3作品、(Mity〈神話〉、Metopy〈小壁画〉、Maski〈仮面劇〉)の曲名がMではじまることから名付けられたもの。3曲に共通するのは、古代文明やオリエント芸術に対するシマノフスキの関心の深さである。

メトープ(小壁画)は、ホメロスの叙事詩「オデュッセイア」に登場する女性を題材にした3曲。豪放にして繊細、しかも極めて難技巧な作品である。